

## 第5 2回船員労働安全衛生月間入選作品

第5 2回船員労働安全衛生月間（9月1日～30日）行事の一つとして、船員とご家族、海運、水産関係者等から広く懸賞募集していました「標語」および「体験記・意見」の入選作品が決定しました。

応募総数は「標語」945点、「体験記・意見」は2編でした。

これらの応募作品につき、関係官庁、関係団体、全日本海員組合、当協会の委員により構成された選考委員会による審査の結果、「標語」では優秀賞6点、佳作4点、また「体験記・意見」では、入選1編が選ばれました(平成20年7月8日)。

### 「予防安全」

独立行政法人 航海訓練所  
練習船銀河丸 次席三等航海士  
中野 弘也

#### 1. はじめに

「予防安全」という言葉を聞いたとき、少し違和感をもちました。予防といえば、危険を予め防ぐ意味で「危険予防」であれば理解できます。しかし「予防安全」とは・・・。  
さっそく調べてみると、この「予防安全」は自動車の世界では普通に使われているようで、居眠り運転防止システムやタイヤ空気圧低下警報システムなどを「予防安全」分野として取り扱っているようです。この「予防安全」の意味を探り、安全について考えてみたいと思います。

#### 2. 「予防安全」とは

「予防安全」とは、事故を予め防ぐことによって安全を確保することだろうと思います。航空分野では「墓石安全から予防安全」という言葉があるそうです。墓石安全とは、事故の尊い犠牲のうえに成り立っている安全という意味であり、従来の安全手法はすべてこの手法に頼っていました。しかし、航空機が大型化して、ひとたび事故が発生すると大惨事となることから、「事故を起こしてからでは遅い」と考えられるようになりました。すなわち、日常業務の中に存在する危険因子を正確に把握して、分析し対策を練って、事故を未然に防止する考え方です。

一方、同様な考えから「ヒューマンエラーの低減からヒューマンパフォーマンスの向上へ」との言葉があります。ヒューマンエラーの低減は、人間はエラーするもので、人間の振る舞いに影響を与える背後要因(ヒューマンファクター)を潰していくという観点から、人間を取り巻く機械や作業環境、管理システムなどの問題点を洗い出して改善を進めるもので、いわば「対症療法」です。これに対し、エラーの低減だけではなく、人間のプラス面を引き出し、人間の持つパフォーマンスを向上させることは事故を予防し、安全を確保するとの考えが「予防安全」です。

### 3. 安全文化の醸成へ

「予防安全」は分野により、また個々の状況により異なりますが、その達成のために共通して言えることは、個人のモチベーションであり、やる気溢れる組織の雰囲気ではないかと考えます。安全を最優先し、安全を追求する個人や組織の姿勢、すなわち、それは安全文化です。したがって「予防安全」には安全文化の醸成は欠かせません。個人のパフォーマンスを向上させることも、組織としてのパフォーマンスを高めることも、全て安全文化の醸成であると言えます。安全文化の醸成が行われることで事故を未然に防ぎ、真の安全を獲得できるのです。

1986年国際原子力機関（IAEA）が行った「チェルノブイリ事故後検討会議の概要報告」によると、「安全文化とは、個人の態度を表すものであると同時に組織的なもの、すなわち機関と個人の双方を含めて、安全問題に適切に対処することを求めるものである。」として安全文化の概念を提唱しています。では、如何にして安全文化を醸成するか、それが一番の問題となります。

### 4. 安全文化の醸成のために

安全文化の醸成、すなわち組織と個人が安全を最優先する気風や気質を育て、社会全体での安全意識を高めていくことです。と言うのは簡単ですが、これを実行し、維持向上させるのは難しいことです。では、どうすれば安全文化が醸成されるのか考えてみました。

#### （1）経営トップの「達成すべき目標」の明確化

経営トップがはっきりとした安全に関する「達成目標」を示すべきと考えます。経営トップの安全最優先の意識が現場にどれだけ伝わっているかが大切であり、経営トップのリーダーシップが重要です。また、トップから現場まで一体となった取組みを行うことが重要です。

#### （2）適切なコミュニケーションの確立

経営トップ・幹部は現場の状況をしっかりと把握できていることが重要であり、適切なコミュニケーションにより達成できます。また、組織内の連携が良好であり、現場からものを言いやすい雰囲気にあることが大切です。

#### （3）学習する組織の確立

潜在する危険が共有され、組織全体の危険感受性が向上するとともに、個々人のモチベーションが高く保たれていることが大切です。また、現場の職員の育成状況、技術伝承状況が重要です。

安全文化の醸成には上記3本柱が重要であり、この3本柱を実行することが、安全文化の醸成につながります。ここで大切なことは、安全文化は人から押し付けられたり、人に任せたりするものではなく、職員一人一人が真剣に考え、自主的・自発的に行うものです。企業の文化や体質などの改革は職員一人一人の自発性からやるべきもので、真の安全文化は幹部から現場まで全職員に浸透したときに醸成したといえるでしょう。そのために、例えば、幹部が現場で膝を交えて安全のための意見交換をするような機会があれば効果的ではないかと考えます。

## 5. おわりに

「予防安全」から“安全文化の醸成”にたどり着きました。真の安全は組織・個人の安全文化の醸成なくして、達成されないものと考えます。「予防安全」も「墓石安全」も、安全文化の醸成によって成果があると同時に、これらによって安全文化が醸成されるともいえます。安全とは、最も重要で大切なかけがえのないものであり、一つの文化として捉えることで、上辺だけでない確固たる安全が得られるものと思います。